



TITLE:

醫學關係圖書展観目録

AUTHOR(S):

CITATION:

醫學關係圖書展観目録. 1995

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/154779>

RIGHT:

自昭和三十年三月廿九日
至昭和三十年四月十日

於 京都大学附属図書館陳列室

醫學關係圖書展觀目錄

主 催

京都大学附属図書館
第十四回日本醫学会總會

1 藥經太素

和氣広世著 二卷一冊 写

草木、虫獸、玉石等二五〇種の藥品を挙げその品質及び主治を論じた藥物書である。延暦一八頃の著作であるが乱世の時代にもその散佚を免れ抄本のまゝに伝へられたが徳川の末期に至って塙保巳一によって校訂され続群書類従に収載された。

2 金蘭方

菅原岑嗣等奉勅撰 卷一—三 一冊 写

清和天皇の命を奉じて貞観一〇（八四六）年撰述せられた五〇卷の医薬の方書である。しかし今日伝来している金蘭方は後人の偽撰で調進薬方は延喜式を抄出し医方は主として千金方に依拠したものであると云はれている。

3 大同類聚方

出雲広貞等奉勅撰 一〇〇卷一〇冊 文化一〇（一八一三）年刊

大同三（八〇八）年平城天皇の命を奉じて国造、県主、諸国の神社又は名族旧家等に伝えられていた薬方を選出類聚したもので、この書によって往古の医方が世に現れることが出来た。しかし今日世にあるものは足利時代の偽撰であると云われている。

4 本草和名

深根輔仁奉勅撰 二卷一冊 写

醍醐天皇の命を奉じて延喜一八（九一八）年に撰述された一〇二五種の藥品を収載する藥物書である。これによって当時の藥物学は所謂本草学であつて藥物の性味を弁識することを主とし藥物の調合とその応用は附随的に攻究せられていたことが窺われる。

5 医 心 方

丹波康賴著 多紀元堅校 三〇巻 三〇冊 万延元（一八六〇）年跋刊

天元五（九八二）年起稿し永観二（九八四）年書成つて、これを円融天皇に奏進した。此書は隋の巢元方の病源候論に依つて脱を立て隋、唐の方書百余家の論を収載している。実に九百余年前に著述された我邦に現存する最古の方書で、これに依つて隋唐医学の真相を窺ふことが出来る。本書は安政元（一八五四）年幕府が半井氏に其の家に伝わる正親町天皇御下賜の医心方を医学館に提出せしめ多紀元堅等に命じてこれを校正模刻せしめて公刊したものである。

6 葉 字 抄

永万二（一一六六）年筆 一卷 卷子〔高山寺旧蔵〕

玉篇、西域記等支那の古書に記載されている藥物を選出類聚した平安朝時代の本草書である。編者、筆者共に確証はないが奥書には「永万二年九月九日丹波抄五巻之内」とあるから典薬頭であった丹波家の何人かに依つて摘録されたものであらう。

本書は本草学の有力な資料であるばかりでなく採取されている原典がその当時に行われていたものであるから原典本来の姿も窺ふことが出来本書の持つ価値は極めて大きい。

7 病 草

紙〔白描〕一卷 写 卷子

8 病 草

紙〔淡彩〕一卷 写 卷子

男女両性の人等世に厭しい奇病の数々を画きつらねてその醜惡な形相がよく活写されている。原本の詞は寂蓮、絵は土佐光長の筆と伝えられているが確証はない。又地獄、餓鬼の二つの草紙と

関連する六道絵の一つで平安末葉から鎌倉初期の間に絵仏師の一派に依って製作されたものであるとも云われている。

本図淡彩画の奥には「癡疾画一卷、大館高門蔵也〔中略〕寛政丙辰〔八（一七九六）〕季冬初五日觀之画所預從四位下土佐守藤原光貞審定圖」とあるが本図はこの年に模写されたものではなく光貞の寛政の模写を後人が更に複写したものであらう。尙他の一本の白描画の巻末には「右奇疾草紙淺井家有二本先生惠投一本於予〔中略〕干時元治元年春田中尙房」と云ふ奥書がある。この奥書の筆者尙房は絵画をよくし、又有職故実に精しく歴世服飾考の著述を以て有名である。八坂、北野兩社の宮司を歴任し京都に於て明治廿四年歿した。

9 喫茶養生記

僧・榮西著 二卷一冊

刊

建保三（一二二五）年將軍源実朝が罹病した時榮西は清茶一盞を進めて、その病苦を医し又これが為に喫茶養生記を著わして、これを献上した。本邦に茶を移植し、これを喫することを学だのは此時代に始まると云われている。

此書は当時の医術の缺陷を挙げて支那及び印度の医風を学ぶべきことを説いている。

10 頓医抄

梶原性全著 五〇卷二一冊 写 〔卷五——二 伊沢蘭軒自筆〕

此書は万安方と共に鎌倉時代に於ける代表的医書で共に性全の著作である。頓医書は嘉元元（一三〇三）年に撰述せられ万安方六二卷は正和四（一一三五）年に撰述せられた。前者は邦文で後者は漢文で書かれているが内容は略ぼ同じである。共に病源候論の目に依って病門を分け千金方

和劑局方等の諸書を参酌しこれに自家経験の説を加えたものである。

本書は伊沢蘭軒の旧蔵書で五〇巻の中卷五至一二はその自筆である。尙卷末に森立之自筆の跋文があり各冊にその蔵書印がある点より見て本書は或る時期に立之の手に歸しその手沢本となったことが判る。

11 続添鴻宝秘要抄

坂 浄雲著 八卷 一〇冊 永正五（一五〇八）年〔自筆本カ〕

坂浄雲は明応年間（一四九二—一五〇〇）明に赴き漢の張仲景の方術を我邦に伝来して益々その盛名をうたわれた。永正五（一五〇八）年浄雲がその曾祖父浄秀の鴻宝秘要抄を増訂して続添鴻宝秘要抄を著し張仲景の傷寒論の薬方を採用するに至って従来の宋医方は次第に衰退し、これに代つて明医方が臺頭した。尙本書の卷首に著述の由来を記した永正五（一五〇八）年の自序があり卷末に浄忠の花押がある。浄忠は浄雲の二男で侍従宮内卿法印となつた人で著書に家秘小雙紙がある。（京都博物館に陳列する）

12 （勿聰子）俗解八十一難經

明・熊宗立撰 一卷 一冊 天文五（一五三六）年刊

熊均、字は宗立、号は勿聰子又は道軒と号した。

明人であるがその生没年は明ではない。此書は秦越人の八十一難經の脉訣を凶解註釈したものである。

跋文に依つて開板は越前国一乗谷の高尾寺に於て行れ、その校正者は入明の名医谷野一柏であることが判る。

13

本草綱目

明・李時珍撰

序目四卷 附・奇經八脉一卷

五二卷

三八冊

寛文一三（一六七〇）年刊

本草綱目

明・李時珍撰

卷首二卷五二卷附・脉学脉訣
考証一卷奇經八脉攷一卷

二二冊

万曆三一（一六〇〇）年刊

証類本草を本としてこれに諸子百家七一〇部の書を参考し薬を増すこと三七四種、品物一八九二種を記載した撰述で万歴一八（一五九〇）年に刊行された。歴代の名医碩学の諸説を参輯評論した此書は本草学の大著であり絶後の大著と称せられている。

14

啓迪集

曲直瀬道三著

八卷八冊

慶安二（一六四〇）年刊

天正二（一五七四）年道三が正親町天皇に奉献した此書は天皇の嘉賞を得て広く天下に頒布せられた。此書は察証并治の全書であって、これに依つて道三学の真相を知ることが出来る。道三の医説は李東垣、朱丹溪の医学を祖述したもので、その医術は診断を精しくし病因を察し又疾病の経過を詳にしてその症状によつて治療の法を異にした。

15

外科心鏡集序

林道栄著

一卷

卷子

〔自筆〕

長崎の医家、林道栄〔寛永一三（一六三六）—宝永四（一七〇四）年〕は又名筆を以て当時世にうたわれた儒者で二四才の時清館の大通詞に拔擢せられた。本書は外科医瀬尾昌宅に与えたその著外科心鏡集の序文である。尚卷末に次の奥書がある。「時寛文歳在丁未〔寛文七（一六六七）年〕陽月上澣林道栄撰於南嚙之草廬記之」

16

蘭医免状

寛文七（一六六七）年筆

一卷

卷子

和蘭陀の外科医アルノヲオト・デレキセン (Arnold Dirckx) が寛文七 (一六六七) 年瀬尾昌宅へ与えた外科の免許状である。

17 本朝医考

黒川道祐編 三卷一冊 写

寛文三 (一六六三) 年に編纂され国史、旧記を博索して我邦の医家の出処、術業及び敍位、産藥等のことを記述したもので我邦、医学の沿革を知ることが出来る一種の医学史である。

18 救民妙藥

(外題・救民妙藥集)

穂積甫庵著 一卷一冊

元祿六 (一六九三) 年序刊

水戸侯 (光圀カ) は其の待医穂積甫庵に命じて山野に於て容易に採取することの出来る品物に就いて其の藥性・治方を記述せしめ救民妙藥と題して、これを広く民間に弘布した。

19 庶物類纂

鱗属

稻生若水編

一五卷三冊

〔自筆稿本〕

貝原益軒の大和本草によつて我邦本草学の基礎が築かれてより次第にこの学は隆盛に赴いたが、若水が正徳五 (一七一五) 年この書を著し品物を挙げてその藥性を詳論するに至つて此学は遂に大成された。最初の三六二卷は若水、二〇年の苦心に依つて編纂され、以下一〇〇〇巻までを、その門下丹生正伯が続編して終に寛延二 (一七五五) 年これを完成した。本書はその中の鱗属の部三冊に過ぎないが若水の自筆稿本である。

20 普救類方

林良適、丹羽正伯著

七卷一二冊 享保一四 (一七二九) 年刊

享保一四 (一七二九) 年幕府は医官林、丹羽の二人に命じて山野に於て採取し易い藥物を選んで、

その利用、治療の方法を著述せしめて普救類方と題して、これを江湖に行わしめた。僻郷にあつて医薬に乏しいものを救済せんとする方途の下に刊行せられたものである。

21 吉益東洞画像

二宮桃亭筆 一軸

吉益東洞〔元禄五（一七〇二）—安永二（一七七三）〕名は為則、号は東洞、安芸広島の人である。東洞の号はその居所が京都東洞院にあつたことに由来する。東洞は陰陽五行等の邪説を斥け自説の万病一毒の信念を以て治療の根本とした。万病一毒論を要約すれば「万病はただ一毒であるが故に毒を去れば病はなほる」と云ふにある。この論を天下に呼号して東洞は当時の医家を慥伏沈黙せしめた。画像の筆者桃亭は東洞の門人で又その女婿である。江戸に住して医を業としたが、又、沈金彫を以て有名である。本図の自賛「死生有命救疾之慎万病一毒毒去無疾」はその信奉する万病一毒の主張を最雄弁に説明している。

22 万病唯一毒

寺益東洞書 一軸〔大字一行書、自筆〕

23 蔵

志 附、附録 山脇東洋著 二巻二冊 写

「解体新書」が世に出る一七年前宝暦四（一七五四）年東洋は京都で死刑囚の死体を解剖して臓腑を調べ人体内臓に関する従来の妄説を指摘して宝暦九（一七五九）年臓志を著した。前人未到のこの快筆に依つて従来の迷妄が打破され、我邦実験医学の端緒はこゝに開かれた。

24 非 臓

志 附上池水 佐野原泉著 一巻一冊 宝暦一〇（一七六〇）年刊

山脇東洋の蔵志に依つて医説漸く一變して古方家は次第に漢蘭折衷家に転進せんとする時に当り
原泉がこれに抗して臓志を反駁したことは興味深い。

25 阿蘭陀本草和解 合綴阿蘭陀禽獸虫魚図和解 一卷一冊 野呂元丈著 写

宝曆一一(一七六一) 医官元丈は幕命を奉じて蘭學を修めていたが当時江戸に滞在中の和蘭医官
に就いて本草學のことを質しこれを筆録したものが此書で洋説本草學の最初の著述である。

26 産 論 賀川玄悅著 二卷二冊 明和三(一七六六)年刊

玄悅は藥石の力の及ばない助産は手術によらなければ功を奏しないことを悟り前人未懇の産術の
境地を開拓して終に明和三(一七七六)年六七才にして著述せられたものが此書である。これに
依つてその名は四方に喧伝せられ我邦産科の祖と仰るに至つた。

27 解 屍 編 河口信任著 一卷一冊 明和九(一七七二)年刊

明和七(一七七〇)年信任はその師荻野元凱と共に罪囚の死体を解剖しこれを西洋の解剖図と対
照してその図説の正確なることを確認して著作されたものが此書である。

28 和蘭陀全軀内外分合図 外題・驗号 附・附図 鈴木宗玄撰次 二卷二冊 明和九(一七七二)年刊

和蘭陀の解剖書を長崎の通詞了意が写して、これに訳字を附したものである。

29 解 体 新 書 蘭・鳩盧模斯著 序図一卷 四卷五冊 安永三(一七七四)年刊

杉田玄白等訳

明和八（一七七二）年玄白は前野了沢と相謀つて中川淳庵等の諸家と共に一社を興じ蘭医クルムスの著解剖図譜の翻譯に著手した。會員相集つて字義を校訂し年を閲すること四年、稿を更めること十一回終に安永三（一七七四）年この偉業は完遂された。これが即ち解体新書で我邦最初の西洋医学書の翻譯紹介である。こゝに於て従来の漢方医学に対し実証的方法が導入されるに至つた。

30

重訂解体新書

蘭・鳩盛模斯著

杉田玄白訳
大槻玄沢重訂

序、目、四卷一三冊 文政九（一八二六）年刊

安永三（一七七四）年に公刊された杉田玄白の解体新書は最初の翻譯の為誤謬があり、玄白はこれが改修を念願していたが老衰の為意に任せず門人玄沢にそのことを委嘱した。玄沢は師命を奉じて訂正の業に従ふこと十年、稿を更めること三回寛政一〇（一七九八）年終に有終の美を成した。題して重訂解体新書と云ふ。

31

診極図説

瀬丘長圭著

二卷 二冊 写

腹を按じて病を診察する腹診法は天正、慶長の間に竹田定加が始めてこのことを唱えて以来諸家相嗣いてこれを唱道したが中にも長圭は専ら力を腹診にそゝいで終に天明元（一七八一）年この書を著した。こゝに於て、長圭はこの法の一家をなし腹診法の進歩を促した。

32

蘭学楷梯

大槻玄沢著

二卷 二冊 天明八（一七八八）年刊

玄沢は蘭字の音韻及接続の概略を記して学者の便を図らうとして天明三（一七八三）年此書を著わした。世人は始めてこの書によつて蘭語を学習する法を知ることが出来た。

33 躋寿館学規

多紀元信編 海保漁村冊補

一卷一冊 写

34 躋寿館諸事控

一卷一冊 写

躋寿館は明和二（一七六四）年多紀元孝が江戸神田に創立した医学の塾である。天明四（一七六六）年に躋寿館百日教育の法が定められた。この法は二月十五日より後百日の間生徒を入塾の上勉強せしめることであつた。講師は多紀元簡、太田錦城等で経学も講ぜられた。又此の百日中には施薬のこともあつて諸生に診療の方法をも学習せしめた。諸生の数四百人に及だと伝えられている。寛政三（一七九一）年幕府は命じて躋寿館を革めて国学とし官医習業の場とした。名付けて医学館と云ふ。

35 施薬院解男躋臓図

三雲環善編 一卷一冊

寛政一〇（一七九八）年施薬院三雲環善等は官に請つて下賜された罪囚の死体を小石元俊の指揮の下に解剖した。本書はその際観臓した吉村蘭洲等に依つて模写された臓器写生図の集成である。每図元俊の註記があり又橋本宗吉は臓器に蘭名を附記している。元俊の序、藤原孝の題言、青山玄泰の跋があるがいずれも皆自筆である。尚巻末には観臓の人員を附記して、ことの事情を詳述している。

36 増補 内科撰要

蘭・我爾徳兄弟著
宇田川榛齋訳

一八卷 一八冊 文化七（一八一〇）年刊

寛政四（一七九三）年宇田川槐園は蘭医ヨハンネス・ゴルテルの内科書（一七四四）を訳し西説

内科撰要と題して公刊したが蘭齋は養父槐園の遺志を嗣いで更にこれを校訂補註し増補重訂内科撰要と題して文化七（一八一〇）年梓行するに至ってこの書の内容は漸く整備された。これが西洋内科書の最初のものである。

37 蔓 難 録

柘植彰常著 七卷 一冊 文化三（一八〇六）年刊

享和元（一八〇一）年著わされた此書は蛔虫病のことを説いもので蛔虫病の專書としては最初のものである。

38 本草綱目啓蒙

小野蘭山口授 小野蕙畝等編 四八卷 二七冊 文化二（一八〇五）年刊

享和二（一八〇二）年に著はされた此書には一八八二種の藥物が収載されている。その異名、方言、形色、産地等の異同に至るまで詳説され我邦の本草学はこゝに於て完備された。寛政一一（一七九九）年蘭山は江戸に召されて医学館に於て本草学を講じた。

39 医範提綱銅版図

宇田川榛齋訳述 一卷 一冊 文化五（一八〇八）年刊

榛齋の遠西医範は蘭医ブランカルツ等の解剖書を訳輯した三〇巻の大部のものであったが一般に認められなかった。後これを抄録し内景図版を付して文化二（一八〇五）年これを上梓にするに及で此書は西洋医学を学ぶ者の軌範として広く世に行れた。内景図版の最初の銅版である。

40 蘭 学 事 始

杉田玄白著 二卷 一冊 明治二（一八六九）年刊

文化一二（一八一五）年八十三才の時の手記でその著解休新書の上梓の時の苦心談を中心として

我邦蘭学の發端とその興隆を敘述した回想録である。

41 眼科新書

塙・ブレンキ著
蘭・フロイス訳

杉田立卿重訳

五巻 五冊

文化一二（一八一五）年刊

西洋眼科の真相を我國の医学会に紹介したのは文化一二（一八一五）年に著わされた此書である。眼目諸症の訳語は此時に選定せられたものが多い。

42 解剖存真図

南小柿甫祐著

二巻

天保一三（一八四二）年複写 卷子

文政の頃西洋解剖図を参照して自己の経験に照らして筆写したもので凡て六四図、末尾に猿の解剖図を添えてゐる。甫祐の引、大槻玄沢、同磐里の跋、宇田川榛齋、杉田立卿の蘭文の跋がある。尚本図は桂川氏の旧蔵より天保一三（一八四二）年に複写されたものである。

43 酷烈辣考

桂川甫賢訳釈

大槻玄沢・森島法蘭校

一巻 一冊 写

コレラが我邦に始めて入ったのは文政五（一八二二）年であるが暴瀉病とよばれて大いに流行した。甫賢は玄沢等と共に蘭人ブロムホブから入手した蘭書に依つて、この暴瀉病がコレラであることを知り音訳して酷烈辣と名付け此書を著わした。

44 瘍科新選

塙・布連吉著

杉田立卿訳

五巻 五冊

天保三（一八三二）年刊

此書は天保三（一八三二）年布連吉の小外科を翻譯し外科の方術に関するものを列挙してその概要を敘したものである。所説は簡略ではあるが和蘭外科の全書としては最初のものであり、これ

に依つて西洋外科の真相が始めて明にされた。

45 遠西医方名物考 宇田川榛齋訳述 三五巻 図攷一卷 補遺九巻 四五冊 文政五(一八二二)年刊

薬物學に専心した榛齋には和蘭藥鏡の著述があるが更に天保五(一八三四)年此書を著し西洋の藥品方劑、製煉等の諸術を明らかにした。西洋藥學はこゝに於て始めて整備されることになった。

46 順正書院記

篠崎小竹・齋藤拙堂等著 二冊 折本(自筆本)

天保一〇(一八三九)年新宮涼庭は京都南禅寺畔に順正書院を創立し医書及び儒書を蒐蔵し儒者をこゝに迎えて經學を講ぜしめ又自からも傷寒論等の医書を講じて大いに諸生を薰陶した。本書は天保一一(一八三九)―嘉永五(一八五二)年に亘つて當時の碩學齋藤拙堂等が涼庭の行実並にその書院の來歴を讚美してこれを撰述し涼庭に獻呈したものである。

47 病學通論

緒方洪庵訳編 三巻一冊 嘉永二(一八四九)年刊

病理を説明することは古くから行れていたが諸病の原因を究明して特別の學科としたのは弘化四(一八四七)年に訳編された此書に始まる。病學通論は「アルゲマイネ、パトロギ」の訳語で此書以前には原病學と稱せられていたが洪庵はこれを病學と改め病學通論と題して嘉永二(一八四九)年に上梓した。

48 牛痘小考

檜林宗建著 一卷一冊 嘉永二(一八四九)年序刊

嘉永二(一八四九)年阿蘭陀船によつて我邦に齎せられた牛痘苗を以てモーニッケは三名の小

見に種痘して、その善感に成功した。宗建はモーニッケに親炙してその説を聞きこれを筆録して著わしたものが此書である。我邦の牛痘種法はこの時に開始せられた。

49 婦人病論

船曳卓堂訳 前後七卷 六冊、嘉永三（一八五〇）年刊

嘉永三（一八五〇）年に訳述せられた此書は我邦に於て最初に刊行された西洋婦人科医書である。しかし此書は主として産科のことを述べ婦人科的疾病の記載は全卷の約三分の一に過ぎない。

50 察病亀鑑

独・扶歇蘭著 蘭・哈傑瀾訳 青木周弼重訳 三卷 三冊 安政四（一八五七）年刊

此書はフーフエランドの著作を翻譯した診断書で顕微鏡的検査及びそれ以後に行われたものはないが粗笨ながら今日応用されている方法は記載されている。

1 江馬蘭齊（一七四七一八三八）手沢本の一部

Ackermann, J. E. :- Geneskundige verhandling over de Engelsche ziekte. Utrecht, 1794.

Baudelocque, J. L. :- Grondbeginsels der verloskunde. Leyden, 1808.

Blancaart, S. :- De nieuwe hervormde anatomia. Amsterda, 1678.

Gorter, J. de :- Nieuwe gezuiverde keelkonst. Amsterdam, 1751.

Le Febure, G. :- Zeldzaame en aanmerkelijke practicale waarnemingen, ... Utrecht, 1783.

1783.

Swieten, G. van :- Korte beschryving en geneswys der ziekten, ... Amsterda, 1764.

Tissot :- Raadgeving voor de gezondheid van den gemeenen man. Rotterdam, 1765.

2 新宮涼庭 (二七八七一八五四) 手沢本の一部

Heister, L. :- Heelkundige onderwyzingen, ... 2v. Amsterdam, 1741.

Kwekschool der ziektekunde. Amsterdam, 1772.

Monro, A. :- Drei verhandelungen over de zenuwen en haare verspreiding. Utrecht, 1773.

Schrage, A. :- Geneese-en heelkunde. Amsterdam, 1782.

Halma, F. :- Woordenboek der Nederduitsch en Fransche talen. 3. ed. Leiden, 1758.

Kaercher, E. :- Latijnsch-Nederduitsch woordenboek. Leyden, 1833.

Bataviaasch genootschap van kunsten en wetenschappen :- Verhandlingen. deel v.

Batavia, 1792.